

## 『二番煎じ』 あらすじ

火事と喧嘩は江戸の華、特に真冬は大火事が絶えないので、町内に火の番小屋を置き、商家のだんな衆が交代で火の番として、夜回りをすることになった。

寒いので手を抜きたいが、夜回り同心の目が光っているので、仕方がない。そこで月番のだんな衆の発案で二組に分かれ、交代で、一組は夜回り、もう一組は番小屋で待機することに決めた。

最初の組が見回りに出ると、凍るような寒さである。みな手を出したくない。拍子木の黒川先生は両手を袂に入れたまま打つので、こつりこつりと小さな音しか出ない。金棒持ちの浪花屋（なにわや）さんは、握ると冷たいからと紐を持ってずるずると引きずっている。宗助さんに至っては提灯を股座（またぐら）にはさんで歩く始末である。

誰かが「火の用心」と大声で呼ばなくてはならないので、拍子木の黒川先生にやらせると「ひィの～よォ～じん」と謡の調子になってしまうし、浪花屋のだんなだと「ひのよおおじいん、よっ」と浪曲風になってしまう。

金久（かねきゅう）さんは、若いころ勘当されて吉原の火廻りをしたことを思い出し、「ひのよおおじん、さっしやりましよおお」と廓の金棒引き。

ひと苦労して戻ってくると、やっと火にありつける。

黒川先生が月番に、酒を持ってきたからみなさんでと、申し出た。

「あんた、ここをどこだと思ってるんです。火の番小屋ですよ。役人に知れたら大変です」とはいうものの、それはタテマエ。

酒だから悪いので、煎じ薬のつもりならかまわないだろうと、土瓶の茶を捨てて「薬」を入れ、酒盛りが始まる。

そうなる肴が欲しいが、おあつらえ向きにもう一人が、猪の肉とネギと味噌を持ってきたという。それも、土鍋を背中に背負ってくるソツのなさ。

一同、先ほどの寒さなどどこへやら、飲めや歌えのドンチャン騒ぎ。

その時、外からバン！　バン！という音がする。何事か！と思っていると、「こ

こを開けろっ。番の者はおらんかつ」と役人の声。

「あー、今わしが『番』と申したら『しっ、しっ』と申したな。あれは何だ！」

「へえ、寒いからシ（火）をおこそうとしたんで」

「土瓶のようなものを隠したな」

「風邪除けに煎じ薬を煎じていますんで」

役人、にやりと笑って、「さようか。ならば、わしにも煎じ薬を一杯飲ませろ」

しかたなく、そうっと茶碗を差し出すとぐいっと飲み

「ああ、よしよし。これは良い煎じ薬だな。ところで、さっき鍋のようなものを」

「へえ、口直しに」

「ならば、その口直しを出しなさい」

もう一杯、もう一杯と、酒も肉もきれいに片づけられてしまう。

「ええ、まことにすみませんが、煎じ薬はもうございません」

「ないとあらばしかたがない。拙者一回りまわってくる。二番を煎じておけ」

\*\*\*\*\*

火の番：町内の防火のため、表通りに面した町家では輪番で人を出し、冬の夜の夜回り（火の番）をすることになっていた。しかし、これはタテマエで、たいていは番人を雇って火の番を代行させていた。

ところが世情騒然としてきた幕末になると、奉行所のお達しでだんな衆が自分たちで夜回りすることになった。この落語は、慣れない厳冬の夜回りで引き起こした騒動のお話し。

二番煎じ：漢方薬を一度煎じた後、さらに水を加え、薄めて煮だしたもの。

吉原の火廻り：火廻りやおいらん道中の際に若い衆が鉄棒を突き、棒先の鉄輪をガチャガチャ鳴らしながら先ぶれをした。「火の用心、さっしやりましょう」という掛け声は、吉原だけに限られていたという。

以上